

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00161

研究課題名（和文）英語圏における日本アニメ作品研究とその批評的テーマの再考察

研究課題名（英文）Reexamination of English-Language Scholarship on Japanese Anime and Its Dominant Critical Paradigms

研究代表者

吉本 光宏（YOSHIMOTO, Mitsuhiro）

早稲田大学・国際大学院・教授

研究者番号：80596833

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：英語圏におけるアニメ研究の歴史と現状、支配的な批評パラダイムの再検討を行うという英文研究書の原稿を七割近く書き終えた。原稿では三つの視点から英語圏アニメ研究を批判的に検討し、日本と英語圏という区別を超えた、新たなアニメ研究の必要性を論じている。第一に、「アニメ」概念の徹底的な再検討を行い、理論と歴史の両側面からこれまでにない大胆な再定義を試みている。第二に、表層的な皮相さに回収できない「ポストモダン」概念の重要性を確認し、その本格的な見直し作業を通じて、アニメの歴史性を詳らかにしている。第三に、「サブカルチャー」概念の徹底的な再検討を通じて、サブカルチャーとアニメの再文節化を試みている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アニメの世界的な人気の高まりや商業的成功にともない、英語によるアニメ研究も学問的分野としてさらに成長し、多くの学術的論文や研究書が出版されている。しかし、英語圏のアカデミアの支配的なパラダイムや制度的文脈の中で流通している「アニメ」概念や歴史観、方法論には特有の傾向や偏りがあり、必ずしも大きな成果を挙げているとは言えない。英語圏アニメ研究の歴史と現状を批判的に再検討し、その成果を最終的に英文の学術書のかたちで発表するという本研究は、たんに研究対象を離れたところから観察するのではなく、英語圏の言説空間に直接介入し対話の回路を開く試みにとりて大いに意義がある。

研究成果の概要（英文）：I have completed about 70% of an English-language book manuscript, which I intend to publish with a US-based university press. The main objective of the book is to reexamine the history and current state of anime studies in the English-language academic sphere. The book also attempts to propose a new paradigm of anime studies that goes beyond the division between anime criticism in Japanese and anime scholarship in English. The manuscript consists of three main parts. In Part One, the concept of "anime" is thoroughly scrutinized. In Part Two, anime is historicized through reexamination of Japan's postmodernism. Part Three attempts to further refine the concept of anime through rearticulation of anime's relationship to subculture.

研究分野：視覚文化

キーワード：アニメ ポストモダニズム サブカルチャー

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

英語圏における日本アニメ研究が始まったのは1990年代からである。そもそもアニメーション研究は映画研究のマイナーな一分野に留まる時代が続き、英語圏の日本研究でアニメを含むポピュラー文化が学問の対象として取り上げられるようになったのは、たかだかここ30年のことにすぎない。しかし日本アニメの人気のグローバルに拡大するのと連動して、英語圏でアニメ研究の機運も高まり、今では見方によっては日本の大学でよりも堅固に研究分野として確立していると言えなくもない。1980年代終わりから90年代初めに大友克洋の『AKIRA』（1988年）が公開され人気を博するのと並行して、アメリカの大学ではアニメの授業が少しずつ開講され始め、最も初期の本格的なアニメ研究書であるスーザン・ネイピアの『現代日本のアニメ：「AKIRA」から「千と千尋の神隠し」まで』が2001年に出版された。その後も現在に至るまで続々と新しい学術書や研究論文が書かれているが、日本語訳もある代表的なアニメ研究書、トーマス・ラマール『アニメ・マシーン：グローバル・メディアとしての日本アニメーション』、アン・コンドリー『アニメの魂：協働する創造の現場』、マーク・スタインバーグ『なぜ日本はメディアミックスする国なのか』などが示すように、学術的関心の射程がアニメのメディア特性、製作システムや産業構造、マーケティング戦略やファンによる国境を越えた受容の多様性などに大きく拡大し、必ずしも作品批評が英語圏アニメ研究の中心とは言えなくなっている。しかし「作品」を「観る」という行為を除外してアニメが成立しない以上、今後も作品批評の意義が減じることはなく、英語圏の学部レベルでアニメ関連科目が増加するに伴い、テキスト分析や歴史的文脈化の方法論をめぐる議論の重要性は益々高まっていくと考えられる。その一方で、日本の優れたアニメ作品批評の海外での影響力は、残念ながら非常に限定的であり、英語による研究論文や学術書が、日本のアニメ批評による知の蓄積に無関心なまま（さらに無関心さに特に疑問を持つことなく）グローバル規模でのアニメ研究のアジェンダを設定するという状況は、今後も続いていくと思われる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に英語圏における学術的アニメ作品批評を包括的に調査し、その可能性と限界を見極めることである。第二にその結果を踏まえて、具体的なアニメ作品の分析から成る英語で書かれた研究書を出版することで、新たなアニメ作品批評の可能性を広く国内外の研究者に問うことにある。すでに「1. 研究開始当初の背景」で触れたように、日本のアニメ批評の膨大な知の蓄積は、英語圏のアニメ研究ではほとんど知られていない、あるいは意図的かどうかは別にして無視をされているという状況がある。これは日本語の重要な著作を英語で読むことができないからであり、英語への翻訳を積極的に進めれば状況は必ずと改善されるはずだという、よくありがちな見解とはまったく無関係である。グローバル規模での学問や批評的言説の主導権を誰が握るのか。特定のアジェンダが、何を目的に設定され、それがアニメについてどのような批評的言説を生み出しているのか。何が学問的知や業績として重視され、逆に何が軽視されたりスルーされたりしているのか。英語圏のアニメ研究は純粹に客観的な評価や分析だけに基いて結果を生み出しているのではない。学問や制度の政治性、英語という「世界共通語」への特権的なアクセス、資源や資本の集中が生み出す大学を中心にした言説空間の権力構造や階層化など、映画研究の分野ではある程度取り上げられてきたこれらの問題群は、英語圏のアニメ研究で真剣に議論されることがほとんどなく、それが日本のアニメ批評との大きな乖離を生む原因の一つにもなっている。さらに言うと、日本のアニメ研究や批評は、質の高さ低さにかかわらず、閉ざされた言説空間を形成している。外部との関係性や、国境を越えて存在する言説空間内での自らの立ち位置に対しては、本質的に無関心であり、グローバルな視点が決定的に欠けている。ただし、日本のアニメ研究はグローバル化する必要があるにもかかわらず、それがまったく進んでいないと言いたいわけではない。グローバル化が必然的な自然現象ではない以上、アニメ研究と学問のグローバル化の関係性も、さまざまな形をとることができるはずである。そもそも英語を共通言語として構成されるグローバルな言説空間とは、一種 **agonistic** な闘争の場である。いわゆる国際的な学術交流や共同研究といった考え方は、こうしたグローバル言説空間を構成する動的な緊張感とは真逆のものであり、時には根本的な問題の存在そのものを隠蔽してしまう。日本のアニメ研究をさらに発展させ、英語圏でのアニメ研究を一過性の流行に終わらせないためには、すでに言及した問題群をメタクリティカルに吟味することが必要不可欠であり、本研究はそうした探求の試みの一つとしても位置付けられる。

3. 研究の方法

「1. 研究開始当初の背景」で言及した学術書を含む過去20年間に英語圏で出版されたアニメ研究書に加えて、アニメ作品を論じた多くの英語学術論文や学位論文を精査する。英語圏で専門分野としてのアニメ研究がアニメの何に注目し、どういった視点から何を目的にどのような方法を用いて探究を進めてきたのかを入念に調査し、英語圏のアニメ研究全体の見取り図を作成する。さらに全体図の中で作品批評が占める地位を再検証し、それが批評の根底にある問題意識

【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

や理論的前提とどう関係しているのかを解析する。検証過程の中で特に重要になるのが、大友作品『AKIRA』を含むアニメ研究によって古典化された作品および宮崎駿をはじめとするクリエイターの作家主義的研究の再検証である。ただし、議論される新旧作品の変遷を整理すること自体が目的ではなく、どの作品や作家が古典化され、それらの作品の支配的な解釈や作家性のイメージがどう変化してきたかを分析することによって、作品批評の基本的枠組みの変化をより明瞭に示すことができると考えられるからである。また日本のアニメ批評や研究との比較が、英語圏のアニメ批評言説の特徴をより明確に描き出すことになるだろう。例えば『新世紀エヴァンゲリオン』が日本のアニメ批評で占める絶対的位置と比較して、英語圏での存在感の軽さは何に起因しているのか。逆に日本では数多くある重要な作品の一つである『AKIRA』が、英語圏においては「アニメ」と呼ばれる日本アニメーションの実質的な「起源」であるかのように扱われてきたのはなぜなのか。宮崎駿をめぐる英語圏と日本の批評言説のあいだに横たわるギャップは、何を示しているのか。こうした問いに対する答えを探究することで、英語圏のアニメ作品批評の可能性と限界を明らかにしていくつもりである。

4. 研究成果

全体として研究はおおむね順調に進んだと考えている。ただし最初の研究計画とは異なる点がある。研究期間の前半では多くのアニメ作品を、具体的なテーマや批評トピックを軸に分類・整理し、作品分析や解釈を行っていた。英語圏のアニメ研究をめぐるメタクリティカルな問題群についての理論的考察にも並行して取り組み、出版予定の英文研究書の序章にするつもりで執筆を進めていた。しかし、英語圏のアニメ研究の理論的基盤やアジェンダを根底から見直す作業の成果は、研究書の一つの章に収まるような分量ではなく、メタクリティカルな考察だけを一冊の独立した研究書としてすることに大きく予定を変更し、研究期間後半は、作品分析は必要最小限にとどめて、アニメ研究の理論や制度の方に研究活動の中心をシフトすることになった。当初から英文学術書の執筆・出版を目標にしているため、学術ジャーナルへの論文投稿や、日本語での学会発表などは行わなかった。また今後の出版に支障をきたす可能性があるため、アニメという概念、ポストモダニズム、サブカルチャーに焦点を当てた三つの章から構成されているということ以外の本の内容の詳細について、ここで説明することは差し控えたい。一方で、国際学会の開催やシンポジウムでの発表は、コロナパンデミックの影響を大きく受けた。イギリスの **Durham University** で開催予定であったシンポジウム (“**Where Are We Now? The Location of Modern Languages & Cultures**”)へ招待されて行くことが決定していたアニメについての個人発表、ブリュッセルの **Université Libre de Bruxelles** での開催を本研究者が企画していたシンポジウム (“**‘Historicizing’ Anime: Media, Narrative, and Thought Experiment**”)などは、コロナ禍での海外渡航制限や現地の逼迫した状況のため、すべてキャンセルという結果になった。ただし、後者はトピックを一つのアニメ作品に変更し、後日オンラインでシンポジウムを行った (“**Suspensions of Concentration: Kimetsu no yaiba and Blockbuster in the Year of the Global Pandemic**”)。またコロナ禍が始まる直前に大規模なアニメについての国際シンポジウムを企画し、実際に対面で開催できたのは幸運であった (“**Theorizing Anime: Invention of Concepts and Conditions of Their Possibility**”)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Mitsuhiro Yoshimoto	4. 巻 5
2. 論文標題 “ In This Corner of the World and the Challenges of Intermedial Adaptation ”	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Series: International Journal of TV Serial Narratives	6. 最初と最後の頁 11-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.6092/issn.2421-454X/9157	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------